

紀 要

第 14 号

2001. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

適応地の拡大過程と地域的差異

—琵琶湖東岸における縄文早期～弥生前期の遺跡立地—

瀬 口 眞 司

1. はじめに

近江は様々な景観をもつ。琵琶湖北端は平地が少なく急峻な山々の裾が湖に迫るが、本稿で扱う琵琶湖東岸では、山と湖の間に広大な平野が広がる。山々からは大小の河川が流れ出て、その麓に扇状地を、更に下位には氾濫平野を形成しながら湖に至っている。山地には山地特有の、琵琶湖岸には湖岸特有の、扇状地や氾濫平野にはそれぞれ特有の景観・土地条件があり、それぞれに見合った生態系が形成されている。

なかなか明らかにしがたいものの、本稿で問題にする時代の生態系も、それぞれの地形区分の土地条件に見合った形で存在していただろう。縄文早期～弥生前期の人々はどのような土地条件・生態系に適応したのか。適応のあり方はどのような推移をみせるのか。本稿の目的はその疑問を解くことにある。

その目的を果たすために現在できるのは、どのような地形区分で遺跡が確認できているのかといった点の整理である。本稿では、琵琶湖東岸における縄文早期～弥生前期の遺跡立地の傾向とその変化を整理した。その結果は以下の通りである。

- 琵琶湖東岸における当該期の遺跡立地は、段階を経ながら変化する。まず、縄文早期前葉・中葉の遺跡立地は、琵琶湖岸や内湖に近接した地点と山地の二極にはほぼ限定される。縄文早期後葉、それまでの立地に加え、扇状地・氾濫平野といった地点でも遺跡が確認されるようになる。縄文中期後葉～弥生前期、扇状地・氾濫平野に立地する比率はより一層高くなる。このことから、適応地の拡大は、縄文早期後葉に始まり、その傾向は縄文中期後葉に一層進んだものと考えられる。
- 地域ごとに細分して観察した場合、縄文中期後葉以降の傾向が、地域ごとで異なる。琵琶湖東岸の北半部では、高燥な扇状地に立地する傾向がほかの地域より高く、時期によっては遺跡立地の主体を占める。一方、琵琶湖東岸の南半部では、より低湿な氾濫平野から湖岸近接地にかけての立地が

主体となる。琵琶湖東岸の北半部と南半部では、適応を試みていった土地条件や生態系に若干の差異があった可能性が考えられる。

以下、上記2点の詳細について述べるとともに、推移のあり方、細分地域間の差異の背景、弥生文化の受容・弥生文化への推移についても、若干の考察を加えてみたい。

2. 作業の対象と留意事項

使用するデータ 琵琶湖東岸の縄文早期～弥生前期の遺跡については、財団法人滋賀県文化財保護協会の紀要などで、小島孝修氏とともに集成成果を公表してきた⁽¹⁾。

本稿では、その中から立地と存続時期をまとめ直して表3を作成し、その集計から傾向を導いた(表4～8)。

なお琵琶湖西岸については、小島氏が集成作業を現在進めているので、本稿では捨象する。

また、今回取り扱う「遺跡」の中には、遺構が無く、数片の土器しか確認されないものも含む。このような資料を他地点からの流入品として遺跡のカウントから除外する考えもある。しかし、例えば短期的な逗留地だった場合、大地への生活痕跡はほとんど残されなかった可能性が高い。このような「遺跡」を取りこぼすことにもなりかねないので、いわゆる遺物散布地も遺跡に含めて検討を進める。

対象地域と細分(図1) 今回は琵琶湖東岸を対象とする。地域的な差異を観察するための便宜として、琵琶湖東岸を更に細かい地域に区分する(図1)。設定した区分は、それぞれ湖北地域(図2)、湖東北部地域(図3)、湖東南部地域(図4)、湖南地域(図5)と呼称する⁽²⁾。

琵琶湖東岸地域は、北部の伊吹山地と南部の鈴鹿山脈を介して東日本に接している。湖北地域と湖東北部地域の境は、伊吹山地と鈴鹿山脈の境でもあり、この緩やかな谷筋は、一大地溝帯となって、東日本

表1 時期区分

早期	前葉	ネガティブ押形文	中期	中葉	船元Ⅱ・Ⅲ式
	中葉	通常の押型文		後葉	船元Ⅳ式～北白川Ⅲ式
	後葉	条痕文	後期	前葉	中津式～北白川上層Ⅱ式
前期	前葉	羽島下層Ⅰ式・轟Ⅱ式		中葉	北白川上層Ⅲ式～元住吉山Ⅰ式
	中葉	羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式		後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝式
	後葉	北白川下層Ⅱb式～大歳山式	晩期	前半	滋賀里Ⅰ～Ⅲa式
中期	前葉	鷹島式～船元Ⅰ式		後半	篠原式～長原式

表2 デビッド・クラークによる各生態系の一次純生産量と食用生産物の比率 (D. クラーク 1976)

	一次純生産量 (gm-2 year-1)	一次純生産量における食用生産物の比率
低湿地・三角州・河口・潟	800～4,000以上	高い
沖積平野・富栄養下の湖・河川流域など	500～2,000	高い
森林斜面・草原など	200～1,500	並

の関ヶ原に通じている。

この地溝帯は、傾斜の緩やかさから、東西日本を結ぶ最も通過しやすいルートの一つとなっている。名神高速道路・JR東海道新幹線・JR東海道線といった現代日本の動脈はここを通過している。

これらのことが示すように、大地溝帯を擁する湖北地域と湖東北部地域には、東日本との地理的な連続性があり、それが故に現代における情報・流通・交通の要衝になっていることが指摘できる。

なお、対象地域の現在までの発掘調査状況として、山間部の調査頻度は平野部に比べて少ない。また、湖北地域・湖東北部地域の調査頻度は湖南地域に比べて少ないことが傾向としてあげられる。このような調査頻度の格差によって、我々が得られるデータは歪められている。このことは、留意事項として明記しておく。

また、近江以外の地域と比べる際に留意すべきことは、水際の調査事例の多さである。昭和50年代以降の琵琶湖総合開発に伴う調査により、当県では、湖岸部周辺の低湿地や湖底から得られる知見を多く持つに至っている。

対象時期と区分(表1) 縄文早期～弥生前期を対象とする。細分時期は「土偶とその情報」研究会の区分に準ずる(「土偶とその情報」研究会1997)。ただし近江では、突帯文土器と弥生Ⅰ様式古段階・

中段階の土器はしばしば共伴するので同一時期とし、以下、縄文晩期後半＝弥生前期前半と記載する。

地形区分とそれぞれの位置づけ 概ね5つの区分を設定する。地形変遷史の検討が不十分なため、現状の地形で代用する。縄文期の検討には不十分だが、おおよその傾向の把握と割り切り、作業を進めることにする。

〔山地〕 山頂や山中の傾斜地が遺跡周辺の主体を占める場合、この地形に立地したこととする。

〔谷底平野〕 山地のうち、谷底に広がる平野が遺跡周辺の主体を占める場合、この地形に立地したこととする。

〔扇状地〕 扇状地のほか、これに類する水はけの良い地形(台地・段丘など)を含む。これが遺跡周辺の主体を占める場合、この地形に立地したこととする。

〔氾濫平野〕 扇状地より下部の自然堤防が分布する平野を指す。これが遺跡周辺の主体を占める場合、この地形に立地したこととする。ただし、琵琶湖や内湖などの水域に接する部分は次の類型に含む。

〔湖岸近接地〕 現琵琶湖湖岸から2 km以内の低湿な地域。ほとんど勾配が無く、自然堤防帯がほとんどみられない範囲にほぼ一致する。これに類する低湿な地形(内湖周辺・沼沢地周辺)に近接する場合もこれに含む。

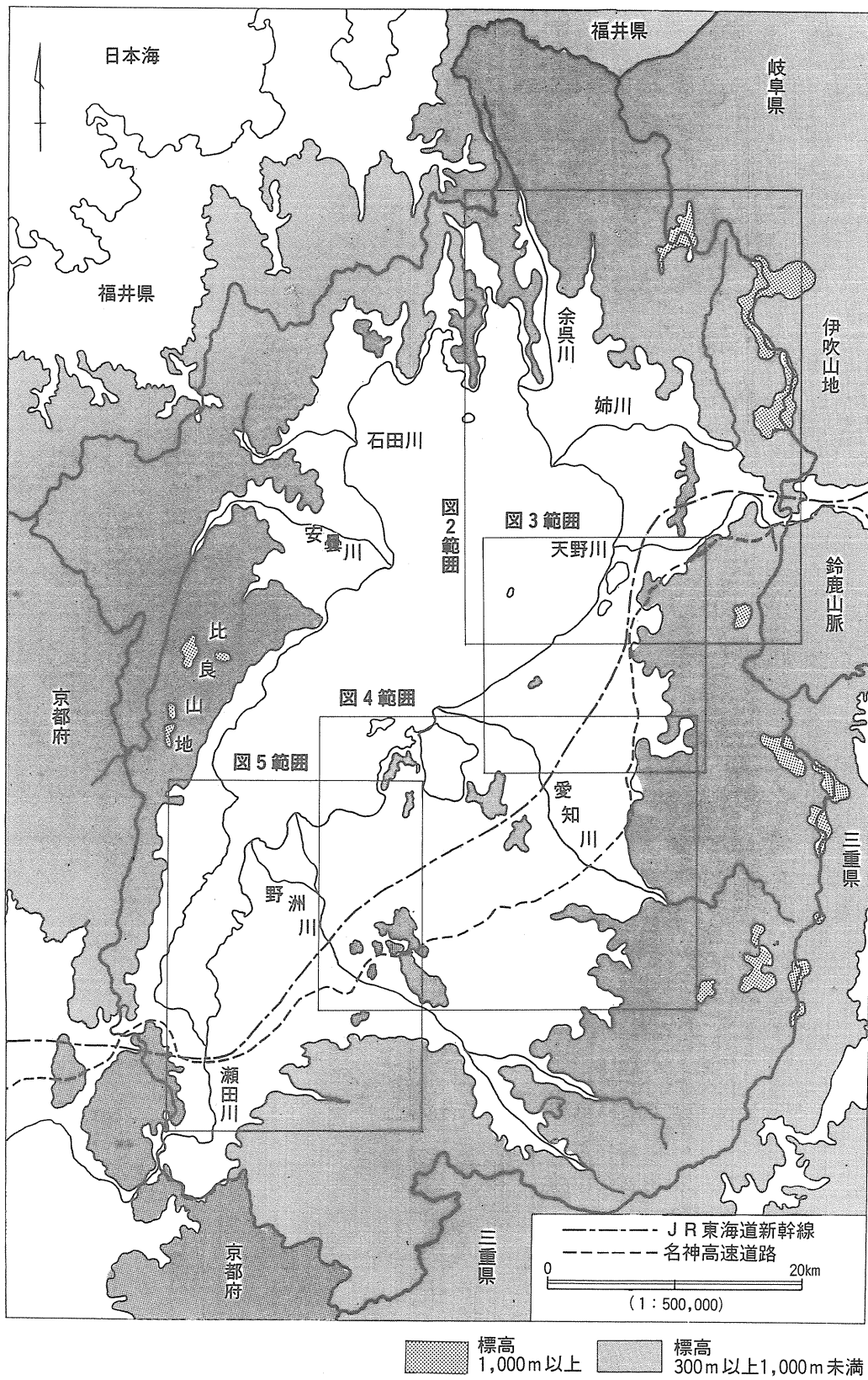


図1 琵琶湖周辺図

表 3-3 遺跡の立地と存在時期

凡例：○=存在時期。湖岸=湖岸近接地。氾濫=氾濫平野。谷底=谷底平野

図No.	遺跡名	地形分類	縄文					弥生		
			早期 前中後	前期 前中後	中期 前中後	後期 前中後	晩期 前中後	前期 前中後	後期 前中後	
湖 東 南 部 地 域	26 千里	氾濫							○	○
	27 掛樋	氾濫							○	○
	28 三敷前	氾濫							○	○
	29 宮の前	氾濫								○
	30 林・石田	氾濫								○
	31 高岸	氾濫								○
	32 下羽田	低湿地								○
	33 五反田	低湿地								○
	34 内堀	低湿地								○
	35 布施横田	段丘								○
	36 布施	段丘								○
	37 常衛	低湿地								○
	38 上出A	低湿地	○		○	○	○			○
	39 中屋	低湿地								○
	40 御所内	低湿地								○
	41 後川	低湿地								○
	42 金剛寺	低湿地								○
	43 蔵ノ町	氾濫								○
	44 久里氏館	低湿地								○
	45 黒橋	氾濫								○
	46 鷹飼	氾濫								○
	47 出町	氾濫								○
	48 鳥打峠	低湿地								○
	49 吉ヶ藪	低湿地								○
	50 内荒井	氾濫								○
	51 城東A	湖岸								○
	52 城東B	湖岸								○
	53 獅子鼻B	湖岸								○
	54 弁天島	湖岸	○	○						○
	55 大中の湖南	湖岸								○
	56 大中の湖東	湖岸	○							○
	57 白王	湖岸	○	○	○	○	○			○
	58 切通	低湿地								○
	59 薬王寺溜	段丘								○
	60 五斗井	段丘								○
	61 風呂流	段丘								○
	62 北代	段丘								○
	63 内池	段丘								○
	64 焼山	段丘								○
	65 野辺	扇状地								○
	66 麻生	段丘								○
	67 大塚城	段丘								○
	68 杉ノ木	氾濫								○
	69 市子	氾濫								○
	70 堂田	扇状地								○
	71 平塚	氾濫								○
	72 田中	氾濫								○
	73 小口	氾濫								○
74 高塚	山地								○	
75 馬淵	氾濫								○	
76 勸学院	氾濫								○	
77 中ノ庄	扇状地								○	
78 長命寺湖底	湖岸								○	
79 大房湖岸	湖岸								○	
80 水基A	湖岸								○	
81 水基B	湖岸								○	
82 水基C	湖岸								○	
83 小田	扇状地								○	
84 沖島湖底	湖岸								○	
85 沖島赤鼻湖底	湖岸								○	
86 宮方浜湖底	湖岸								○	
湖 南 地 域	1 夕日ヶ丘	氾濫								
	2 小堤	扇状地								
	3 辻	扇状地	○	○	○					○
	4 高野	扇状地								○
	5 立入荒牧	扇状地								○
	6 吉身北	扇状地								○
	7 益須寺関連	扇状地								○
	8 岡	扇状地								○
	9 狐塚	扇状地								○
	10 下鉤	扇状地								○
	11 野尻	扇状地								○

表 3-4 遺跡の立地と存在時期

凡例：○=存在時期。湖岸=湖岸近接地。氾濫=氾濫平野。谷底=谷底平野

図No.	遺跡名	地形分類	縄文					弥生			
			早期 前中後	前期 前中後	中期 前中後	後期 前中後	晩期 前中後	前期 前中後	後期 前中後		
湖 南 地 域	12 伊勢	扇状地							???	○	○
	13 小柿	扇状地							○		
	14 中沢	扇状地								?	?
	15 播磨田東	氾濫							○		
	16 酒寺	氾濫							???		
	17 八ノ坪	氾濫							???	??	
	18 今市	氾濫								?	○
	19 吉身西	氾濫							??	○	
	20 播磨田西	氾濫							???	??	
	21 石田三宅	氾濫							○	○	
	22 寺中	氾濫									○
	23 経田	氾濫							○		
	24 古高	氾濫							○	??	
	25 古高城	氾濫									??
	26 二町鏡	氾濫								???	
	27 塚ノ越	氾濫							○	???	
	28 下長	氾濫							○	???	?
	29 横江	氾濫							○		○
	30 上寺	氾濫							?	○	○
	31 欲賀城	氾濫									?
	32 芦浦	氾濫									○
	33 檜皮堂	氾濫							○		○
	34 壺仙寺	氾濫							○	○	○
	35 北太田	氾濫							○	○	?
	36 宝田	氾濫									○
	37 片岡	氾濫									○
	38 赤野井湾	湖岸		○	○	○	○	○	○	○	○
	39 小津浜	湖岸									○
	40 山賀	湖岸									○
	41 烏丸崎	湖岸									○
	42 津田江湖底	湖岸							○	○	?
	43 志那湖底	湖岸							○	○	○
	44 七条浦	湖岸									○
	45 市三宅東	氾濫							○	○	○
	46 小篠原・和田	扇状地									○
	47 五之里	氾濫									○
	48 野々宮	氾濫									○
	49 服部	氾濫									○
	50 湯ノ部	氾濫									○
	51 八夫流	氾濫									○
	52 八夫	氾濫									○
	53 比江	氾濫									○
54 木部川ノ手	氾濫									?	
55 西河原森ノ内	氾濫									○	
56 野田沼	湖岸									○	
57 大池	山地									○	
58 大山	山地									○	
59 狸山	山地									○	
60 横土井	山地									○	
61 湧濟谷	山地									○	
62 野路小野山	山地									○	
63 野路岡田	山地									○	
64 矢橋湖底	湖岸							○	○	○	
65 北壺	湖岸							○	○	○	
66 御倉	湖岸							○	○	○	
67 北山田湖底	湖岸							○			
68 粟津湖底	湖岸	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
69 唐橋	湖岸	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
70 堂谷	湖岸	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
71 石山	湖岸	○	○							○	
72 沢谷	山地									○	
73 桐生辻	山地							○			
74 田上山	山地									○	
75 上田上牧	谷底							○			
76 森添	谷底									○	
77 里西	谷底									○	
本稿での段階			1	2	3						

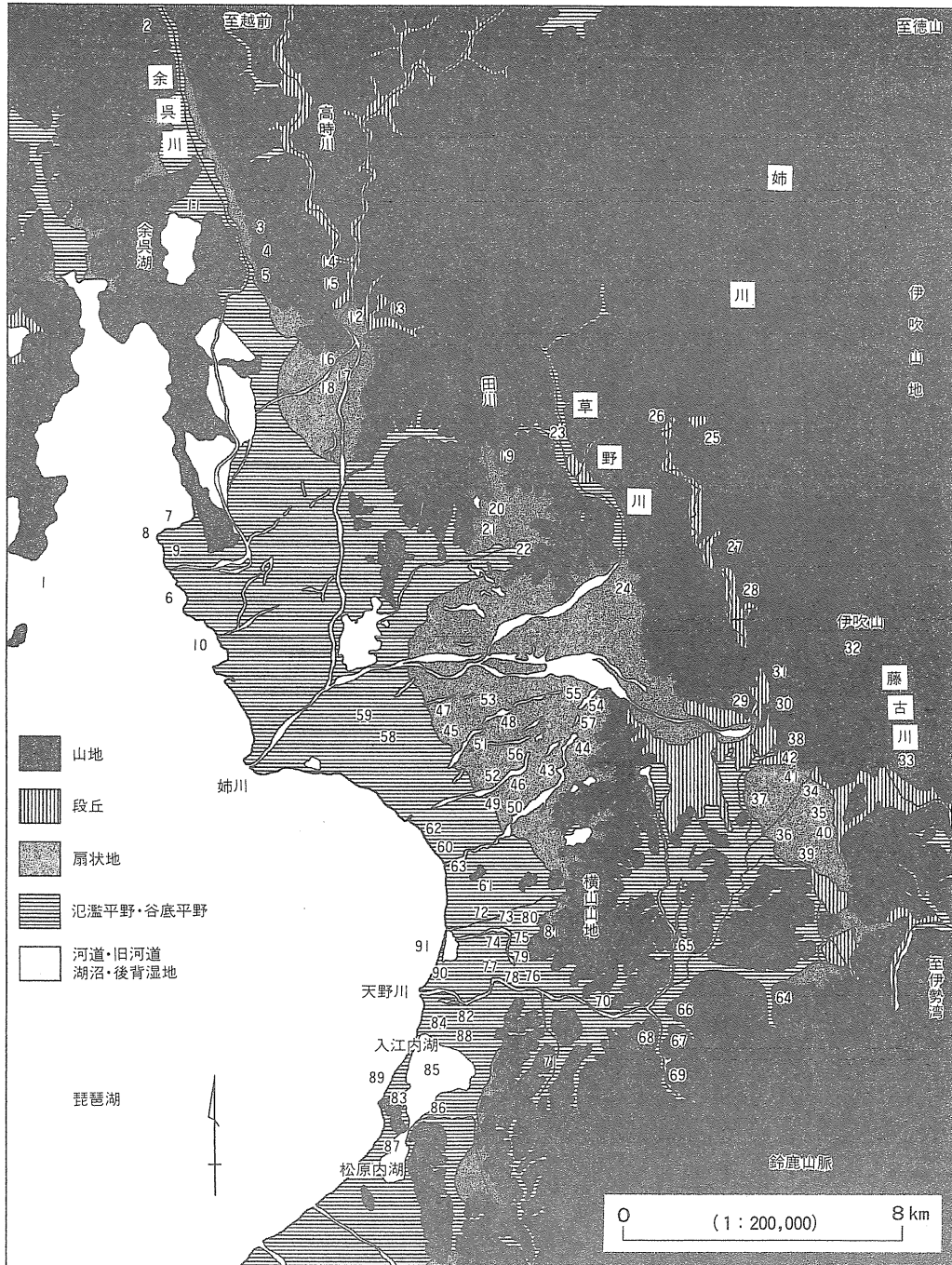


図2 湖北地域 遺跡分布図 (瀬口 2000aより転載)

なお、D・クラークは各生態系の一次純生産量と食用生産物の比率を試算している(表2)。これを参考にした場合、低湿地や三角州、河口、渦を擁する湖岸近接地は最も高い一次生産量を有していることが指摘できる。

3. 事象の整理

(1) 琵琶湖東岸の全体的傾向

まず、琵琶湖東岸における全体的な傾向とその意味を見出してみよう。琵琶湖東岸における時期的な推移を表4に示した。この表にみえる変化から、以下のような段階を設定することが可能である。

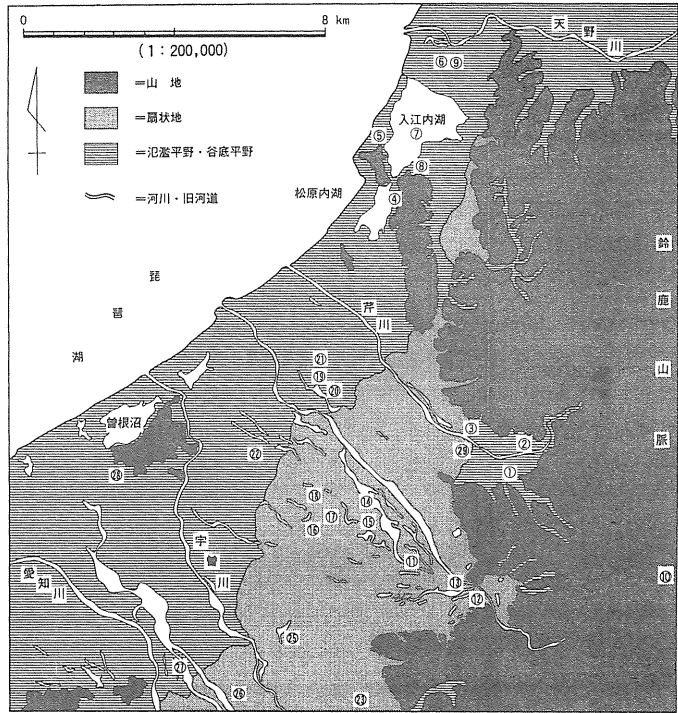


図3 湖東北部地域 遺跡分布図 (瀬口 2000bより転載)

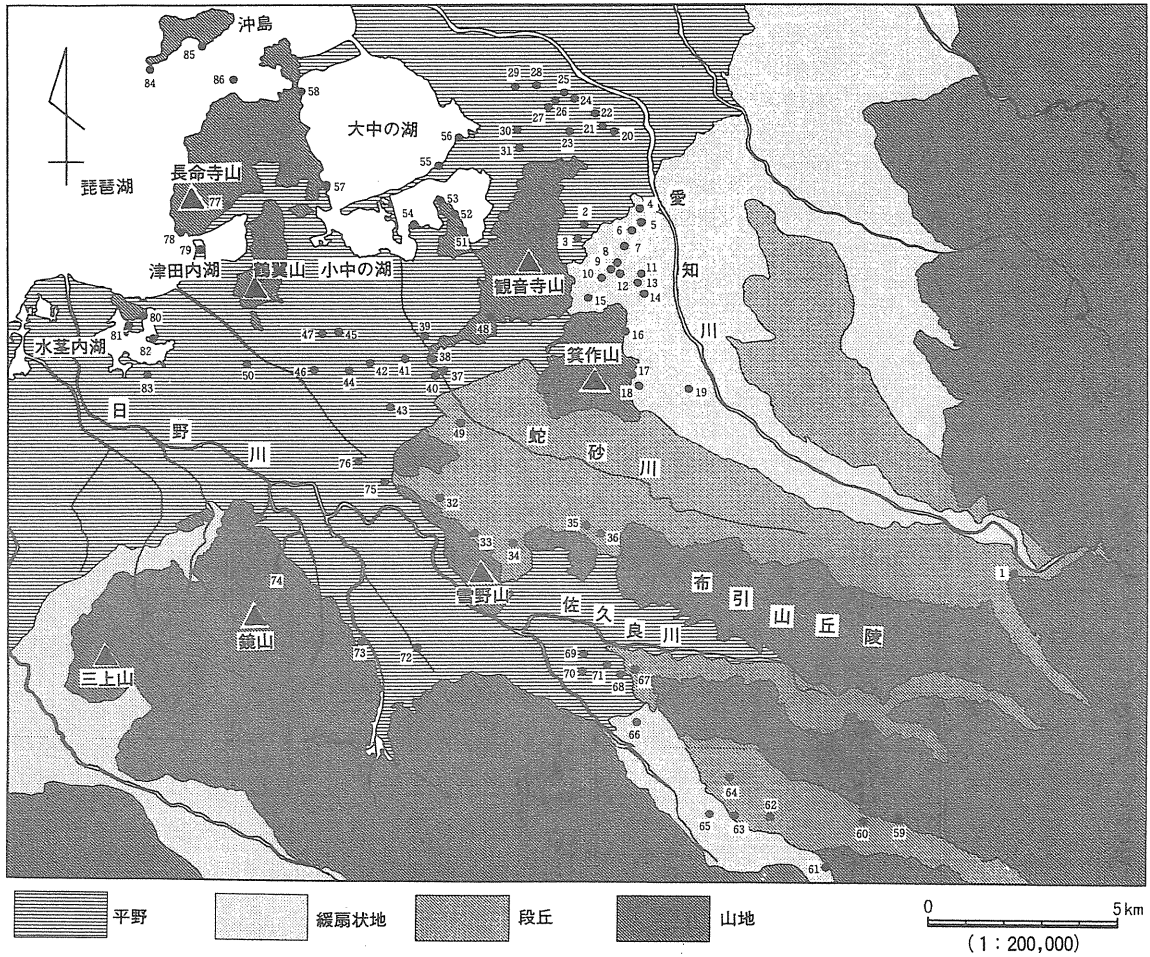


図4 湖東南部地域 遺跡分布図 (小島 1998より転載)

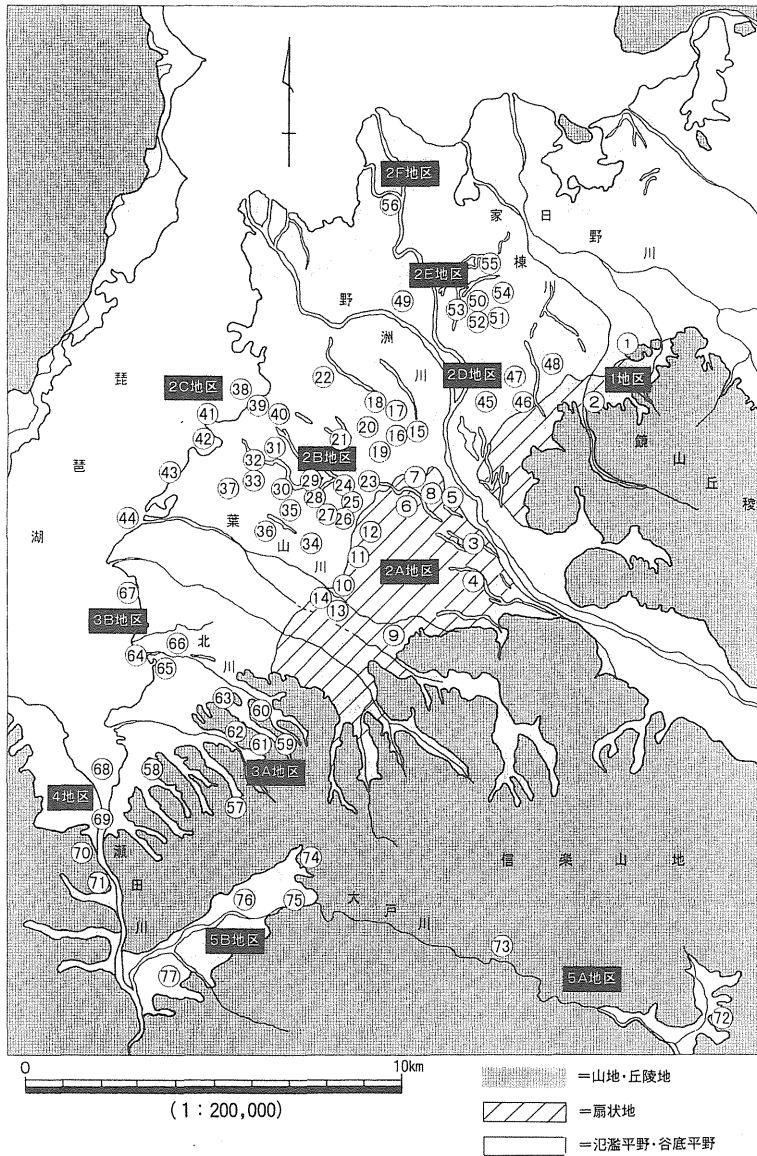


図5 湖南地域 遺跡分布図 (瀬口 1999より転載)

第1段階 縄文早期前葉・中葉。湖岸近接地と山地を中心に立地する時期。

第2段階 縄文早期後葉～中期中葉。湖岸近接地の卓越性は続くが、扇状地や氾濫平野にも立地していく時期。

第3段階 縄文中期後葉～弥生前期後半。湖岸近接地の圧倒的な卓越性がみられなくなる。第2段階の傾向がより強まり、湖岸近接地に立地する比率が低下し、扇状地や氾濫平野に立地する比率がより増加する。

第3段階については、後述するように弥生時代における立地との関連性が問題になる(渡辺1975)ので、下記のような細分段階も設定し、概略を観察してお

こう。

第3A段階 縄文中期後葉～晩期前半。第2段階の傾向がより強まり、扇状地や氾濫平野に立地する比率がより増加する。

第3B段階 縄文晩期後半＝弥生前期前半。いわゆる弥生文化のうち、少なくとも土器に関する規範が部分的であるにしろ、近江に到達したと考えられる時期。第3A段階と近似した傾向を持続する。

第3C段階 弥生前期後半。いわゆる弥生文化のうち、水田農耕に関わる施設や道具(水田・灌漑用水・農具)が散見されるようになる時期。第3B段階に比べて扇状地の比率が半減し、より低湿な氾濫平野や湖岸近接地の比率が増加する。

(2) 細分地域ごとの事象

以上で設定した画期を参考にしながら、次に細分地域ごとの傾向をみてみよう。

湖北地域(表5・図2) 第1段階は、山地と湖岸近接地で立地が確認される。第2段階、従来の立地に加え、扇状地での立地が確認されるようになる。以降、扇状地に立地する比率は増加し、その反面、湖岸近接地に立地する比率は低下していく。

第3段階、湖岸近接地に立地する比率は大きく低下し、扇状地に立地する比率が上昇し始める。氾濫平野に立地する遺跡も確認されるようになるが、その比率は小さい。第3B段階・第3C段階における比率は、扇状地が主体で、50%を占める。

湖東北部地域(表6・図3) 第1段階は、湖岸近接地で立地が確認される。第2段階、従来の立地に加え、扇状地での立地が確認されるようになる。以降、扇状地に立地する比率は増加し、反面、湖岸近接地に立地する比率は低下していく。

第3段階、氾濫平野・谷底平野に立地する遺跡も確認されるようになるが、その比率は低く、扇状地

に立地する傾向が主体を占める。第3 B段階・第3 C段階における遺跡立地の比率も扇状地が主体で、50%強～70%弱を占め、湖北地域のあり方に類似する。

湖東南部地域(表7・図4) 第1段階は、湖岸近接地で立地が確認される。第2段階、従来の立地に加え、氾濫平野での立地が確認されるようになる。以降、氾濫平野に立地する比率は増加し、その反面、湖岸近接地に立地する比率は低下していく。

第3段階、湖岸近接地に立地する比率は大きく低下し、氾濫平野に立地する比率が上昇し始める。扇状地に立地する遺跡も確認されるようになるが、その比率は小さい。第3 B段階・第3 C段階もそれらの傾向は持続し、立地の主体は氾濫平野+湖岸近接地で、70～90%強を占める。このあり方は、上記2地域のあり方とは大きく異なり、後述する湖南地域のあり方に極めて類似する。

湖南地域(表8・図5) 第1段階は、湖岸近接地で立地が確認される。第2段階、従来の立地に加え、様々な地形区分で遺跡が確認されるようになる。

第3段階、湖岸近接地に立地する比率は大きく低下し、氾濫平野に立地する比率が上昇し始める。扇状地の比率は小さい。第3 B段階・第3 C段階もそれらの傾向は持続し、立地の主体は氾濫平野+湖岸近接地で、80～90%強を占める。

(3)小結

以上、推移、細分地域間の差異の2点について整理することができた。

まず、推移については、第1段階(縄文早期前葉～)、湖岸近接地と山地を中心とした立地であったこと、第2段階(縄文早期後葉～)、その傾向に変化の兆しが現れ、湖岸近接地に立地する比率が相変わらず卓越するものの、扇状地や氾濫平野に立地する遺跡がみられるようになったこと、第3段階(縄文中期後葉～)、前段階の傾向がより強まることがかがえた。

細分地域間の差異については、第1段階・第2段階における細分地域間の差異は微小であることがまず指摘できる。第2段階の湖東北部地域だけ傾向が異なるようにみえる(表6)。しかしこれは、この時期の湖東北部地域の確認事例数が、ほかの地域の確

認例より少ないために生じた誤差と考えて良いだろう。しかし、第3段階以降の細分地域間の差異は明瞭である。琵琶湖東岸の北半部と南半部では傾向が大きく異なる。

以上のことから、適応地の拡大過程と地域的差異については以下のように述べることができる。

湖岸近接地および山地における適応 第1段階は、「湖岸近接地および山地」もしくはこの二極が近接した地点⁽⁴⁾に適応するあり方で、山地のほかに一次生産量に恵まれた低湿地などを擁する湖岸近接地に強く依存するあり方だった。暖かい季節は湖岸近接地、堅果類の収穫が期待される季節から冬にかけては、森林の多い山地へと回帰的に反復移動する季節的定住生活を送っていた可能性も考えられる⁽⁴⁾。

なお、湖岸近接地と山地の二極が近接する地点としては、湖北地域における近江町域の遺跡(図2の72～80)や、湖南地域の石山遺跡周辺(図5の68～71)が該当する。近江町は東に聳える横山山地と琵琶湖に挟まれた地点であり、琵琶湖と山地といった二極が近接した地点の典型である。

また、今回は触れなかった湖西南部地域(本号小島孝修氏論文「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き -地域の検討6. 湖西南部地域-」参照)における南半部の遺跡群も琵琶湖と比叡山地の二極が近接した地点に位置しており、典型例の一つになると考えている。

適応地の拡大 縄文早期後葉、低湿地はそのまま重要な立地対象地域でありながら、それ以外の低地(扇状地・氾濫平野)に適応地が拡大していく。本稿ではこれを第2段階と呼んだ。立地における大きな変換期の萌芽である。

扇状地・氾濫平野への本格的な適応 第3段階、扇状地や氾濫平野での活動機会が大きく増加する。湖岸近接地にも依存しながら、扇状地・氾濫平野への適応が確立した段階とって良いだろう。

湖岸にのみ依存するあり方はこの段階でみられなくなったといえる。そのほかの湖岸近接地以外の低地にも適応が大きく進んだ段階である。

しかし、湖岸近接地に立地する遺跡は、依然として多くみられるので、琵琶湖岸を生活の対象から除外したり、水質の悪化などで琵琶湖岸に適応できな

くなったわけではない。むしろ、居住形態や生活技術の変換によって、扇状地や氾濫平野に対する適応が一層進んだ段階とみるべきだろう。

高燥地志向の北半部と低湿地志向の南半部 以上のように、第3段階には低地への適応が進んだが、北半部にあたる湖北地域・湖東北部地域と南半部にあたる湖東南部地域・湖南地域では傾向が大きく異なる。北半部ではより高燥な扇状地に立地する傾向が強い。一方、南半部では、より低湿な氾濫平野～湖岸近接地に立地する傾向が強い。同じように適応地の拡大が進むものの、対象とした土地条件・生態系は地域によって微妙な差異をみせている。

次章からは、西日本全体の縄文時代立地論に関するこれまでの知見を踏まえながら、以上の認識をより深める作業を行いたい。これまでの知見で主なテーマとなってきたのは、推移そのもののあり方、地域的差異、低地化の背景の3点である。以下、それぞれ章を立てながら検討を加えてみたい。

4. 推移のあり方について

これまでの知見 大枠で2つの見方がある。かりにモデルAとモデルBとして記述してみよう。

モデルAは、泉拓良氏・矢野健一氏らの考えである。主に近畿地方の事例から、泉氏と矢野氏は、縄文早期の遺跡は比較的標高が高いこと、縄文後期頃から低い地点に中心が移ることをそれぞれ指摘した(泉1985a・泉1985b・矢野1999・武藤2000)。本モデルは、主たる立地が山地から低地に移動したことを強調する点に特徴がある。⁽⁵⁾

モデルBは、森本六爾氏・小野忠熙氏・小江慶雄氏らの考えである。その特徴は、湖岸近接地や海岸近接地という水辺が、早くから遺跡の立地の対象だったことに触れる点である。

森本氏は、縄文集落の立地が、①海岸高地性(海岸島嶼の洪積層上)遺跡→②一般高地性(より高い洪積層上)遺跡→③低地性遺跡の順に推移すると述べ、②への移行時期を「厚手式」、③への移行時期を「薄手式」とした(森本1943)。

また小野氏は、①縄文早期前半、河口の潮間帯や潟湖に臨んだ台地・尾根に立地していたこと、②縄

文早期後半以降、標高1,000m級の高地にも展開がみられること、③縄文中期後半、居住帯の垂直的な重心は再び下がったことを指摘した。このうち、②の背景としては縄文早期以降の気候の温暖化を、③の背景としては、気候の冷涼化と海水準の低下に対する照応をあげた。また、縄文後期後半～弥生前期は海水準が更に低下したため、垂直的居住帯の重心が更に下がり、汀線が後退した縄文晩期には、低地が水田可耕地となり、稲作農民が渡来して弥生文化を醸成したことなども想定し、森本氏の見解を掘り下げた(小野1985)。

琵琶湖湖底遺跡の研究をライフワークの一つとした小江氏は、近江には山地帯の遺跡と琵琶湖岸の遺跡があること、湖岸の遺跡の時期が、早期より晩期の各期に及んでいることを指摘した(小江1967)。また、資料の増加した琵琶湖周辺を検討した筆者自身も同様な見解を述べたことがある(瀬口1994)。

本稿での見解の位置付け 位置付け作業の前に、条件を整理しておこう。従来の議論における立地の区分は、高地と低地の二項である。このうち高地は、本稿における山地にあたる。そして低地は、本稿における扇状地・氾濫平野・湖岸近接地が該当するといつて良い。

筆者が本稿で導いた結論の一つは、「湖岸近接地(=低地)および山地(=高地)」主体の立地から「湖岸近接地(=低地)および扇状地・氾濫平野(=低地)」主体の立地に変化するといったものである。先に挙げたモデルBの範疇にある考えである。湖岸近接地といった低湿な地点が早くから立地の対象になっていたとする小江氏の先見の指摘を、本稿前半の成果は数量的に裏づけている。

モデルAの評価 以上のように、近江の傾向は早い段階から低湿地が立地において重要な位置にあったことを示している。この点に関しては、小江氏らの見方の範疇にあり、泉氏らのモデルAとは異なる。なぜ違う意見となるのか整理しておきたい。重要なのは、地勢の差異である。

地勢とは、「地形における大まかな傾向」とでもここでは定義しておこう。地勢が異なれば、そこで活動する縄文人の生活戦略は大きく異なり、適応地とその推移も相違した可能性がある。このことは想

定せねばなるまい。例えば、山がちな丹後や但馬地域と、比較的大きな平野(低地)を擁する地域とでは、土地条件が大きく異なる。その結果、過去社会が残した痕跡のあり方が地域ごとに相違することも十分考えられる。もし、2つのモデルを生む原因がこの点にあるならば興味深い検討対象といえるだろう。

一方、現代社会の事情も考慮に入れるべきであろう。地勢が異なれば、重点的に開発される地形も異なるため、調査頻度の多い傾向にある地形も異なる。その結果、分析結果は地域によって大きく異なってしまう。

例えば近江の場合、昭和50年代以降、水資源開発公団による琵琶湖総合開発に対処するため、琵琶湖沿岸部について可能な範囲で網羅的な調査を行った。湖岸近接地のような低湿地の遺跡を資料として取り扱うことができたのは、湖岸部の開発とそのために鋼矢板を打ってまで行った調査があったからである。その反面、山間部での縄文遺跡の把握は今後の重要課題となる。

また、矢野氏が分析した兵庫県八木川上・中流域の下流域で調査が更に大きく進展したとき、縄文時代の古い段階の多数の遺跡が検出されるかも知れない。実際、その東に位置する丹後半島の海岸では、近年、当該時期の遺跡が続々と確認されつつある。小江氏・小野氏らの予見に蓋然性が与えられる可能性は高い。縄文早期、海水準は現在より低かった。当時の水辺での生活痕跡は、今、海底にある可能性は高い。近江の山間部における調査の進展と共に、各地の沿岸部・潟・旧沼沢地周辺の調査の進展を期待したい。

また、地域間の比較検討から何らかの成果を生むには、地勢の差を考慮に入れた方法・解釈の筋道の整備が必要だろう。今後、建設的に議論していったならば、縄文人の生活戦略を語っていく上で重要な成果を生むだろう。

5. 細分地域間の差異について

縄文中期後葉以降の細分地域ごとの遺跡立地の傾向には、既に述べたように明瞭な差異が認められた。琵琶湖東岸の北半部と南半部で、地勢が大きく変わるわけではない。従って、地勢の差異が影響を与え

た事象の差異ではない。ほかにどのような背景が考えられるであろうか。

東日本と西日本の遺跡立地のあり方には、時代差・段階差を越えて地域差があることを、かつて渡辺誠氏は指摘している。

関東地方の遺跡立地の特徴は、ローム台地上で遺跡が検出される例が多いことである。これは縄文時代と弥生時代の時代的差異を越えた特徴として指摘されている。

西日本の遺跡立地の特徴は、低地で検出される例が多いことで、これも縄文時代と弥生時代の時代的差異を越えた地域性として指摘されている。

これらを踏まえた上で、東日本をいわば高燥地志向、西日本を低湿地志向と渡辺氏は考えたのである(渡辺1975)。

ここで、①地理的な位置関係と、②琵琶湖東岸の細分地域間における傾向の差異を改めて整理したい。

①まず、北半部と南半部の位置関係はどうか。北半部は、天野川地溝帯という最も東日本に抜けやすいルートに接し、関ヶ原という東日本への門戸に隣接している。北半部は、南半部より東日本に地理的に近い。

②傾向の差異としては、琵琶湖東岸の北半を占める湖北地域・湖東北部地域では、縄文中期後葉以降、高燥な扇状地に立地する遺跡の比率が高いのに対し、琵琶湖東岸の南半を占める湖東南部・湖南地域では、縄文中期後葉以降、より低湿な環境の多い氾濫平野や湖岸近接地に立地する遺跡の比率が高い。

以上の①と②を参照した類推からは、縄文中期後葉以降の琵琶湖東岸の北半部の遺跡立地のあり方は、高燥な土地を好む東日本の志向に通じ、琵琶湖東岸の南半部は低湿な氾濫平野志向の西日本の志向に通じていたと考えることも可能である。北半部は西日本一帯の傾向と一線を画し、隣接する東日本によく似た志向にあったと考えるわけである。

縄文中期後葉、強い影響力を持った文化的な波が、東日本から西日本に向けて押し寄せたことが指摘されている。泉拓良・丸山雄二は、そのような東日本からの流れは、まず琵琶湖東岸湖北地域で在地化した後、西日本に拡散したことを述べた(泉・丸山1992)。先の想定に関わる意見として興味深い。

現在も名神高速道路や東海道新幹線や在来線は、関ヶ原と湖北地方を經由して行き交う(図1)。また、湖北の山々は、近畿・中国地方の山々だけでなく、中部・関東・東北の山脈にも連なっている。琵琶湖東岸北半部(特に湖北地域)は、現代社会における情報と物流の大動脈の結節点であるが、このような性格は遅くとも縄文中期後葉にまで遡るといえる。

また、縄文中期後葉に東日本が与えた影響は、本稿で問題にしたような生活の基盤となる適応のあり方にまで影響を与えている。特に湖北地域が受けた東からの影響は、物質的な側面だけでなかった可能性を指摘しておく。

6. 低地化の背景について

渡辺誠氏は、西日本の縄文時代後期以降の遺跡が低地に多く分布し、弥生時代以降と同様な自然堤防上や扇状地に立地している事実に注目し、稲作の受容と展開に大きな意義を有していることを指摘した。そして、西日本の縄文遺跡の立地条件を再検討することは、弥生文化の形成や発展に関しても、重要な視角を提示すると述べた(渡辺1975)。

また、岡山県の動向を整理した平井勝氏、但馬地域を検討した矢野健一氏は、縄文後期に低地へ遺跡が集中していく背景には、生業形態の変化があったことを慎重な立場・表現をとりながら推察した(平井1987・矢野2000)。近江はどうであろうか。

同様な傾向が認められる部分は確かにある。山地に立地する遺跡の比率は、縄文中期中葉までは5.1%、縄文中期後葉以後は3.3%である。高い地点の遺跡は減少し、その意味では遺跡立地の低地化が認められる。

しかし重要なのは、縄文時代の早い時期から低地に立地する遺跡の比率はそもそも高いという事実である。扇状地・氾濫平野・湖岸近接地といった低地に立地する遺跡は、近江の場合、縄文後期以降に増加するわけではない。特に湖岸近接地に立地する遺跡の比率は、縄文早期前葉から既に高かったのである。

縄文中期後葉もしくは縄文後期以降にみられる傾向は、「遺跡立地の低地化」ではない。この段階にみられる変化は、水辺と山地の二極に主に立地する

あり方から、それに加えて、二極に挟まれた広大な扇状地・氾濫平野にも適応地を拡大させたことである。そもそも低湿地の利用や、低湿地に立地する遺跡数の卓越は縄文早期前葉に遡る。標高の低い地点での活動は縄文早期前葉といった縄文時代の早い段階に遡っている。低地に立地する傾向は、弥生時代特有もしくは弥生時代に近い縄文後・晩期に特有な傾向ではない。弥生社会の主たる生産基盤と考えられている「水田を中心とした生業」との脈絡の中でしか、低地に立地する遺跡を語らねばならないわけではない。

縄文農耕に関する復元作業は今後の課題であるとしても、その存在についてはむしろ肯定すべきと筆者は考えている。しかしながら、その具体的背景・あり方については様々な可能性を模索する必要がある。現状では矢野氏らと同様に慎重な態度をとっておこう。

現在、積極的に表現しておくべきことは、縄文人の志向性が多様な地理的条件に適応する方向に動いたこと、その結果として、水田稲作の導入に都合の良い条件が育まれた可能性がある、といった点に留まるのではないだろうか。

なお、弥生文化のうち、土器に関する規範が到来した第3B段階には、湖南地域では湖岸近接地の比率が再増加する。水田農耕に関わる施設や道具が散見されるようになる第3C段階には、湖北地域では氾濫平野に立地する遺跡の比が増加する(表5)。また、第3C段階、湖東南部地域でも湖岸近接地に立地する遺跡の比が増加し(表7)、湖南地域では扇状地に立地する遺跡がほぼ消え、より低位な氾濫平野に立地する遺跡の比率が増える(表8)。いずれも、より低湿な地形への移行を示しており、これらについては弥生文化の受容の一形態と捉えて良いかも知れない。ただ、それ以前の立地と生業の関係については、現状では不詳といわざるを得ないだろう。道具類の考古学的な検討、自然科学的分析を用いた環境復元を待たねばこの問題は解決しない。

7. 今後の課題

1975年、渡辺誠氏は、今後の課題として、個々の遺跡の正確な立地条件の確認、低地に位置する遺跡

のリスト化、全遺跡の中での相対比の算出などから歴史的評価を加えていく必要を指摘した。今回の筆者の検討も、その指摘の延長線上にある。現段階では、琵琶湖東岸という限られた地点の検討でしかないが、今後は地域間の比較研究を進め、それを有機的に統合して解釈を進めていきたい。

ただ、有機的な検討を進めるには、比較する条件面において幾つかの障害がある。最も留意すべき問題は、先述したとおり、地勢の差異である。

検討対象地域によって地勢は大きく異なる。また、重点的に開発される地形も異なるため、調査頻度の多い傾向にある地形も異なる。その結果、分析結果は地域によって大きく異なってしまう。比較検討から何らかの成果を生むには、地勢の差を考慮に入れた方法・解釈の筋道の整備が必要だろう。

また、遺跡として認知されるには、彼らの活動が累積化していること、調査機会と掘削深度が十分であることが前提である。しかし、そのような条件が満たされないこともままあり、本稿で試みたような遺跡を素材とする研究には困難がつかまとう。実態とかけ離れがちな事象であることに留意しながら、検討を続けていきたい。

最後に本稿の不足部分を糺しておこう。今回は、遺跡の数量的な操作から立地のあり方に言及してみた。しかし、質的な部分に言及していないだけに、踏み込みが甘くなっている。この点为本稿の最大の不足部分である。これを解消するためには、①地形区分それぞれがもつ生態学的な意味・位置の設定、②遺跡の数量的な操作だけでなく、遺構や遺跡の内容をも含めた作業が必要であり、③推移の因果関係・背景の検討も視野にいれた検討姿勢が必要である。改善していきたい。

(せぐち しんじ：調査整理課主任技師)

註

- (1) 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 地域の検討1～5」と称する共同研究で、財団法人滋賀県文化財保護協会の『紀要』に連載した。瀬口1998・1999・2000a、小島孝修1998などが該当する。瀬口1998については、その後の調査の進展に伴い、瀬口2000bで補筆訂正を行っている。本稿での遺跡・遺構・遺物に関する出典は、断りのない場合、これらの集成からの再引用である。出典

の再録は紙数の都合から避けたので、必要な場合はこれらの集成を参照されたい。

- (2) 湖北地域=長浜市、山東町、伊吹町、米原町、近江町、びわ町、虎姫町、浅井町、湖北町、高月町、木之本町、余呉町。湖東北部地域=彦根市、豊郷町、甲良町、多賀町、愛知川町、愛東町、湖東町、秦荘町。湖東南部地域=近江八幡市、八日市市、安土町、竜王町、蒲生町、日野町、五箇荘町、能登川町、永源寺町。湖南地域=大津市東部、信楽町、草津市、栗東町、守山市、野洲町、中主町。
- (3) 例えば、湖北地域における近江町周辺の遺跡(図2の72～80)、湖東南部地域における安土町上出遺跡周辺(図4の37～42・44)は氾濫平野に位置する。しかし、いずれもその東側に聳える小山塊が上流側からの沖積を妨げ、土砂が堆積しにくい状態が長く続いた。そのため、多くの湿地帯を有しており、その観点から低湿地もしくは湖岸近接地に含んで本稿では記述する。
- (4) この点の詳細については「回帰的に反復移動する季節的定住からの展開」として、2001年5月刊行予定の『久保和士君追悼論文集(仮称)』に投稿すべく、現在準備している。
- (5) 泉氏は、泉1985aの中で、近畿地方における低地での竪穴住居の出現が縄文中期末であることから、低地部への適応は縄文中期末だと結論付けた。しかし、竪穴住居とその立地は、その時々々の居住形態と深く関わっている。竪穴住居の有無からのみ適応を語ることには、下記のように問題がある。

確かに、縄文中期中葉以前の湖岸近接地に、竪穴住居の痕跡はほとんど認められない。しかし、縄文早期前葉以降、多量の土器の出土例は数多くある。クリ塚や貝塚、集石遺構の確認例もある。多数の地点で生活の痕跡は確認できるのである。

民族誌を紐解くと、竪穴住居は本来避寒のための施設で、温暖な季節には簡易なテントを用いる例が多いという(武藤2000)。縄文時代にもそのようなケースは十分想定できる。簡易なテントのような住居を用いた場合、地面に残る痕跡は少ないだろう(瀬口1998・10頁、瀬口2000・15頁、武藤2000)。

高度経済成長前までの春・夏の湖岸近接地には、産卵のために大量・多種類のコイ科魚類が押し寄せた。また、浅瀬には足の踏み場もないほど貝類が生息し(瀬口1994の註(10))、ヒシの実も繁茂していた。これらはいずれも採集・加工に手間取らず、特別な技術も必要ない。利用は十分可能である。春・夏の湖岸は魅力にあふれている。この季節、簡単なテントなどを用いて、この魅力あふれる生態系の恵みを享受し、森の木ノ実のなる頃、深い森に覆われる土地へ移動する。そのようなシステムは十分想定できるし、そのあり方を想定したとき、初めて湖岸近接地における考古的事象(土器はあるのに竪穴住居がないこと)が説明できるものと考ええる。住居、特に竪穴住居の痕跡がないからといって、湖岸近接地に適応していなかったとは言えないの

である。これらの詳細については別稿を期したい(註(5)に同じ)。

なお、本来、泉氏は低湿地を軽視する立場ではなく、むしろ最も早く重要視し始めた研究者の一人である。渡辺誠氏と並び、西日本の低湿地遺跡研究のパイオニアと言っても良いだろう。その具体的な適応開始時期については触れていないが、近年の著書でも、縄文文化を低湿地に適応した文化と位置づけている(泉1996、54・55頁)。

引用文献

- 泉拓良1985a 「Ⅱ. 縄文時代」『図説発掘が語る日本史 4 近畿編』
- 泉拓良1985b 「縄文集落の地域的特質」『講座考古地理学第3 C 巻』
- 泉拓良編1996 『歴史発掘 2 縄文土器出現』講談社
- 泉拓良・丸山雄二1992 「近江の黎明」『古代を考える近江』吉川弘文館
- 小江慶江1967 『水中考古学研究』
- 小野忠熙1985 「日本の先原史集落」『講座考古地理学第4巻』
- 小島孝修1998 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討 2. 湖南部地域一」『紀要』第11号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司1994 「近江の縄文時代 一 2つの疑問点を考える一」『文化財学論集』
- 瀬口眞司1998 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討 1. 湖東北部地域一」『紀要』第11号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司1999 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討 3. 湖南地域一」『紀要』第12号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司2000 a 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 一地域の検討 5. 湖北地域一」『紀要』第13号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司2000 b 『一般県道敏満寺野口線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書金屋遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 「土偶とその情報」研究会1996 「西日本をとりまく土偶 土偶シンポジウム六 奈良大会資料集」
- 平井勝1987 「第3章 縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館
- 武藤康弘2000 「竪穴住居と半定住一縄文時代の竪穴住居の居住施設としての非安定性一」『帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集 3 住まいと住まい方』
- 矢野健一1999 「環境への適応」『縄文世界の一万年』集英社
- 渡辺誠1975 「第5章 総括」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』

(2000年12月28日脱稿)

編集後記

今回は8編を数える多数の論文を掲載することができました。内容も、縄文時代から近世までと各時代の研究論文のほか、普及事業についての報告もあり、バラエティに富んだものとなりました。

埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しくなっていますが、我々の調査・研究の成果をわかりやすくお届けできるよう、今後も様々な形で努力していきたいと思えます。

(T. K)

平成13年(2001年)3月

紀要第14号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668